朝日新聞（2021・2・27）

そよかぜ

ガイド歴32年 磨いた技

◆シンガポール

マスクをしていない人はいないか。行列が混みすぎていないか――。2月初め、シンガポール中心部の繁華街を、赤いポロシャツを着た2人の男性がパトロールしていた。ジェームズ・パンさん(60)と、デビッド・チューさん(55)。住民に新型コロナウイルス対策を守るよう促す、政府の指導員だ。

ふたりとも、本職は日本語の旅行ガイド。「こんなことになるとは、思いもしなかったですね」。パンさんが言った。

パンさんはガイド歴32年。勤めていた日本企業で東京からの出張者を案内していた経験を生かし、フリーのガイドになった。

観光業は、景気や社会の状況に左右されやすい。2003年にSARS（重症急性呼吸器症候群）が流行したときも、しばらく旅行は下火になった。だから収入を安定させるため、中華料理店チェーンの営業マンとしても働いて「二足のわらじ」を履いてきた。

だが、今回の危機は想像を超えていた。昨年1月下旬から、ガイドの依頼はゼロ。料理店からも契約を切られた。シンガポールは4月から約2カ月間の外出制限に入り、いよいよ仕事を再開するめどは立たなくなった。

焦りと不安の日々。「職を見つけるには、自分を高める必要があった」。政府の就職支援プログラムに参加し、小売業のマネジメントなどについてオンラインで学んだ。政府観光局からコロナ指導員の依頼が来たのは、7月。「収入面でも、とてもありがたかった」

巡回は週5日、休憩を挟んで8時間。楽な仕事ではない。歩く距離は長く、市民の視線も集める。中には注意をすると、逆に怒り出す人もいる。殴られた同僚もいる。

でも、怖くはなかった。相手の機嫌を損ねないようにしながら言うことを聞いてもらうのは、ガイドの仕事で何度も経験してきたことだ。表情、身ぶり、声、言葉。磨いてきた接客技術が生きた。「普通の人よりは、少しだけ、面の皮が厚いんです」。パトロールを応援してくれる人もいて、やりがいがある。

観光の再開はいまだ見通せない。でも、パンさんは楽観的だ。「日本からの旅行客？明日にでも来てほしいね」と笑いつつ、「ワクチンの接種も始まったし、少しずつ状況はよくなっていますよ」。旅行客たちを得意の「おやじギャグ」で笑わせる日が、遠からず来ると信じている。

（西村宏治）